

今年の白ゆり

市川茂子

五月二十日の朝、露のしたたる白ゆりの花一束を、自転車の前かごに入れて持ってきてくれた。大通りを渡った区境の近い所に住んでいる、昔から親しくお付き合いしている友達だ。数年前から庭に白ゆりの花をたくさん栽培しているとのことで、咲きはじめてくると、お身内の方やご近所の方々にも差し上げているそうで、その時から忘れずに持ってきてくれる。

今年のお花は、いつもの年より小振りのようで、丈が低く一本の茎に花が一つか二つぐらいしか付いていない。気候の変動などお天気具合のせいか、作り手の肥料の配分かどうかわからない。その時の自然現象や、花にも人と同じように色々なことがあるだろうと思うが、白ゆりは香りも高く清らかに輝くのである。

それでも十五本で花の数が二十三個あった。大きな花びんを少し底上げして飾ると、部屋いっぱいには白く輝くような花の美しさには言葉もなく時を忘れて眺めてしまう。

昨年まではお花が届くと、お隣さんやお友達を呼んでお茶会をしながら、賑やかな一時を過ごすことができたのに、コロナ禍ではそれもできないが、致し方ない。美しい花を独り占めにして此処だけが外界と隔離されたような静かな空間で、花に酔い痴れ、われを忘れた一人の老婆が座っている。

一日の二十四時間は後もどりすることもなく、待つてくれることもない。たちまちに過ぎてゆく。テレビの電源を入れると、コロナウイルスの予防接種のこと、自粛宣言の延長、また事件・事故など、騒然としてめまぐるしく動く社会が、足もとに迫って来る。予防注射が痛い^{のんき}と暢気なことを言っていられない、家の中でつまずきながら、身の廻りを片付けながらあせっている。

美しく気高く咲いて香る白ゆりを育てているお友達に感謝しながら、来年もまた、楽しみに待つことにしよう。